

《翻訳》

## 『人口論短評』(上)

柳 沢 哲 哉

### 1. 解題

ここに翻訳した『人口論短評』の原タイトルは *Remarks on a Late Publication, entitled, "An Essay on the Principle of Population; or, a View of its Present and Past Effects on Human Happiness. By T.R.Malthus, A.M. Fellow of Jesus College, Cambridge"* である。著者の記載はなく、出版者はロンドンの R.Bickerstaff, 値段は2シリング, 62ページのパンフレットとして刊行された。タイトル・ページには1803年と記載されている。しかし, パトリシア・ジェームズのマルサス伝によれば, 実際の刊行は1804年3月である。<sup>(1)</sup>

マルサスの『人口論』初版(1798年)は刊行直後から、『アナリティカル・レビュー』(1798年8月号)や『マンスリー・レビュー』(1798年9月号)などに書評記事が掲載された。そこでは, 神学章(第18,19章)への違和感の表明はあるものの, 概ね肯定的な論評が行われた。レビュー誌以外でも, 例えばサミュエル・パーは『スピトール説教』(1801年)でゴドウィン批判を評価し, 人口原理については「人口はある条件のもとで幾何級数的に増加し, 大地の生産物は算術級数的にしか増加しない」とする「根本原理を無条件で受け入れる」とマルサスを賞賛した。貧民境遇改善協会の中心人物であったトマス・バーナードは, 人口の増大が悲惨と悪徳によって妨げられることを認め, また自然的な害悪は卓越した徳や慈善の存在に不可欠であるとする立場から, 同協会の『報告書』(1802年第3巻)で批判の多かった神学章

を肯定した。

ゴドウィンは『パーのスピトール説教の考察』(1801年)において, 悲惨と悪徳以外にも「徳, 慎慮, プライド」に起因する人口の妨げが存在することを指摘した。<sup>(2)</sup>しかし, 興味深いことに, 『人口論』初版の主要な批判対象であったにもかかわらず, ゴドウィンは『人口論』を「経済学の理論に過去一世紀のいかなる著者よりも大きな貢献をなした」と高く評価し, その最大の貢献と位置づけた級数命題を「論破できない」ものと賞賛した。人口増加肯定論者であったペイリーは『人口論』初版の隠れた批判対象であった。しかし, ペイリーもまた『自然神学』(1802年)では級数命題を用いて社会的害悪(civil evils)の原因を説明するなど, マルサス説に接近することになる。<sup>(3)</sup>

フランス革命の熱狂が残る時期に刊行された初版は, このように批判対象者からも幅広く好意的に迎えられたのである。ところが『人口論』第2版(1803年)になると風向きが変わりはじめる。『マンスリー・レビュー』の書評記事(1803年12月号と1804年1月号に分載)のような肯定的な論評も行われるが, それらは少数派となる。激しい批判がロマン派の文学者サウジーにより, 『アニユアル・レビュー』で行われる(1804年1月号)。サウジーによれば, マルサスは性欲を規制できないという間違った前提から議論しており, 前提を認めれば子殺しや「人為的な不妊」が有徳なものになるだろうし, 神の全能を否定することになる。そして, 道徳的抑制の導入はゴドウィン批判の破綻だと断じた。また, 救貧法廃止論についても, 貧者には「欠乏からの死滅」を説き, 富者には「心を冷淡にする以外には何もすべ

きでない」ことを説くものと非難した。このサウジーによる書評記事は批判の厳しさから、これまでも取り上げられることがあり、それ以降のマルサス批判の原型を作り出したと評されることもあった。<sup>(4)</sup>サウジーは『人口論』第2版を対象としているにもかかわらず、社会制度の改良を全面否定していると断じるなど、初版との相違などはほとんど考慮していない。それは分析的な批判というよりも、むしろ感情的な否定という性格が強い。

『人口論短評』はおそらく単独の刊行物による最初の批判である。前半部は冗長で、誤読にもとづく批判も含まれているが、サウジーのものとは対照的に、『人口論』の論理に接近した批判となっている。ジェームズが指摘しているように、後のイングラムらによる『人口論』批判と共通する論点を提示しており、『人口論』批判の一つのパターンを提示したと見ることができる。道徳的抑制の普及を楽観視している点など、興味深い資料でもある。事実、同時代の『ジェントルマンズ・マガジン』（1804年10月号）には、『人口論短評』を実質的に対象とした書評記事が掲載されており、一定の関心と呼んだことが推測できる。しかし、ジェームズのマルサス伝での言及を除けば、これまでの『人口論』研究において『人口論短評』はほとんど論じられることがなかったように思われる。杉山忠平・A.パイル編集のリプリント版に『人口論短評』は採録されている。しかし、「マルサス『人口論』の最も悲観的な初版に対する反応」という有害無益と言わざるをえない編集者改題を掲載している。<sup>(5)</sup>『人口論』が与えた影響の大きさはしばしば語られてきたが、残念ながら同時代の文献資料がまだ十分に研究されているわけではない。訳出した理由はここにある。

『人口論短評』の主要な論点のうち、前半で主に論じられている人口原理とそれに関連する3命題について補足しておきたい。匿名氏が「混同している」と批判しているように、マルサスは「人口原理」という言葉を一義的に用いているわけではない。南亮三郎の定式化に従えば、人口原理の構成要素は大きく増殖原理と規制原理とに分けら

れる。増殖原理（principle of increase）とは、生活資料を超えようとする人口の不断の増殖傾向という意味で、この表現そのものは『人口論』第2版から登場する。規制原理は南の造語で、人口は生活資料の水準によって規制されるという意味である。マルサス自身がプラトンまで遡れると述べているように、増殖原理は古くから知られていた。また、規制原理についてもマルサスは序文で「多くの著作家により注目されてきた明白な真理」と語っており、両構成要素それ自体は独創的なものでないことを認めている。<sup>(6)</sup>マルサスが自らの独創としたのは、人口の妨げとして現れる規制原理の発現形式、その帰結と影響の解明である。第2版序文では次のように述べている。「〔人口と生活資料とを均衡させる〕水準が実現するいろいろな仕方を研究したものはほとんどなく、そしてこの〔規制〕原理は十分にその帰結まで追求されることもなければ、それが社会におよぼす影響を嚴重に検討すれば分って来ると思われる实际的結論を、そこから引き出しもしない」。サウジーやハズリットは、人口原理のオリジナリティを否定し、『人口論』を剽窃であると論難した。マルサス自身がオリジナリティを主張した部分は限定されているから、こうした論難は適切ではない。これに対して、匿名氏はオリジナリティ問題には簡単に触れるのみで、『人口論』の核心である人口と生活資料との均衡の仕方に議論を集中させている。

人口原理の用例は、厳密には必ずしも増殖原理と規制原理とに二分しきれない。中西の細分類によれば、『人口論』初版中の「人口原理」8例は、(1)増殖原理に関連するもの3例、(2)増殖原理からの派生とも言える困窮や害悪の原因を意味するもの2例、(3)規制原理に関連するもの2例となっている。『人口論』6版には「人口原理」が48例あり、(1)増殖原理に関連するものが16例、(2)その派生である困窮や害悪の原因の意味で21例、(3)規制原理に関連するもの3例となっている。この他に増殖原理そのものの表現が10例ある。このように出現数だけで見れば、人口原理は増殖原理を意味する場合が多数を占めている。<sup>(7)</sup>

したがって、人口原理を増殖原理の意味だけで用いるべきだ、とする匿名氏の論評は用例の出現回数から見れば適切なものと言える。

人口原理と関連させて匿名氏は、いわゆる「人口の3命題」に分析を加えている。マルサスは明示的に3命題と人口原理との関連を語っているわけではないが、増殖原理と規制原理が一体となって人間社会における人口の運動を具体的に表現したものが3命題であると位置づけることができる。匿名氏も引用しているが、第2版第1篇第2章末尾の3命題は次のとおりである。「1. 人口は必ず生活資料によって制限される。／2. 人口は、あるきわめて強力かつ明白な妨げによって阻止されなければ、生活資料が増加するところでは常に増加する。／3. これらの妨げ、および優勢な人口増加の力を抑圧し、その結果を生活資料と同じ水準に保つ妨げは、全て道徳的抑制、悪徳および悲惨に分解することができる」。第1命題は規制原理を含意している。第2命題は増殖原理の前提である潜在的な人口増加力の強さを意味している。また同命題中の「阻止されなければ」という条件は、増殖原理が人間社会ではそのまま発現しないことを含意している。第3命題は増殖原理の帰結、およびそこから必然的に作用する規制原理の発現である人口の妨げを提示している。第1命題を人口と生活資料との均衡した状態と解釈すれば、第1命題から第3命題は一体のものとして、人口と生活資料の均衡状態から均衡の破壊された状態、さらに均衡への回復を描写していることになる。生活資料の供給が社会的に決定されることは言うまでもないが、この3命題では生活資料がいわば外生的に変動し、人口が従属変数となっている。第1命題は自明なもので、第2命題と第3命題は経験的に論証できるとマルサスは考えていた。

マルサスにとって3命題は重要な意味を持っていた。それは、第2篇末尾にも再度登場することや、第2版以降も3命題に注を加えるなどの修正を試みたことから明らかである。それゆえ、『人口論』の核心部分と対峙しようとした匿名氏は、3命題にこだわり、再三にわたって引用を行いながら、批判を試みたのである。

## 2. 翻訳<sup>(8)</sup>

数年前、文芸界や政治界の関心が、匿名の著者が書いた人口に関する『エッセイ』に向けられた。それは人口というきわめて重要な主題に関して興味深くまた斬新な考え方を含んでいた。はるかに大部で包括的となった『人口論：人口が人間の幸福に与えた過去と現在の影響の考察』で、著者は姿を表した。実験的な匿名の著書で試みが成功し、その名声が急速に広まったので大胆になった著者は、この新しい著書のタイトル・ページで名前を明かした。こうして彼は名声を手中におさめたのである。

明確な人口原理の確立と説明という点では、あるいはその原理から苦心して導出した主張と結論という点でも、マルサスのオリジナリティは少しも賞賛に値しない。多くの政治的な著作が人間という種のきわめて強力な増殖力を強く意識してきた。プラトンの時代からゴドウィンまで、自らの偉大で至福に満ちたシステムがいかなる帰結になるのかということを見捨ててきたわけではない。しかし、先駆者がいてもマルサスのオリジナリティは損なわれない。むしろ、先駆者たちが曖昧にしか語っていない結論にたどり着いたことこそが、マルサスの能力と地位をより高めることになる。マルサスと彼以前の論者との主要な違いは、それは極めて重要な違いでもあるのだが、マルサス以外の論者は過剰人口がもたらす害悪、別の言い方をすれば人口〈原理〉の抑制されない作用がもたらす害悪を、遠い将来のものと考えてきた。全ての大地が農耕地として耕作しつくされ、生産物が大地の力の極限に達するまでは、そうした害悪を社会が経験することはないと考えてきたのである。たとえ可能性があったとしても、極めて遠い将来に位置付けられたので実際にはあり得ないものとされた出来事は、人間の幸福の計算においては取るに足りないもの〔cypher〕と見なすのが適切であった。また、そうした類いの帰結をもたらす仮説に意義をはさまないのが適切とされてきた。このように障害が取り除かれてしまえば、人

間の本性と人間社会の完成可能性についての思索は、常人の理解をはるかに越えて自由に舞い上がっていき、「華麗な王宮」を作りあげ、黄金の夢にふけることになるだろう。仮にマルサスが彼らのシステムの根本的な反駁だけを提示し、それ以外の目的や結論がなかったとしても、帰納哲学の真の擁護者として感謝され名声を得る資格はある。マルサスが明らかにしようとしたのは、生命を生み出す比率を生活資料に合致させる自然の偉大な法則によって、人口の原理が長い間、ほぼすべての社会で妨げられてきたことと、そして、これまで到達しそうなほど遠い将来のものとされてきた帰結を伴うその妨げが、実はこの世の初めから存在してきたと推測できるということである。マルサスが立証したのは、人口が直面しているのは、大地の改善の可能性ではなく、現実の改善だということと、そして、大地の生産物が増加する比率は潜在的な人類の増殖の比率よりもはるかに低いために、人類の増殖は必然的に生活資料の不足によって抑制されるということである。しかし、人口の増加に関しては、土地が豊かか痩せているかではなく、急速に増えているか停滞的であるかが問題である〔著者訂正に従う〕。

（一度、住民で満たされた状態になると）肥沃度が最も急速に増大したとしても、それに伴う人類の無制限な増加には全く不十分である。マルサスはこの学説を著作の冒頭部分の2つの命題で語った。

1. 「人口は必ず生活資料によって制限される。」
2. 「強力で明らかな妨げの作用によって阻止されなければ、人口は生活資料の増加があるときには必ず増加する。」〔p.16〕<sup>(9)</sup>

この学説は容易に論証可能なだけでなく、単純で理解しやすい。この自然の根本的な法則の一つは、歴史と観察、それに推論によっても明らかにできる。しかし、この主題に関する明確な見解および主題が持つ広さとその説明については、『人口論』の著者に多くを負っている。しかしながら、この原理の作用が人間の幸福にどの程度、影響をあたえるのか、すなわち社会の進歩を進める傾向があるのか遅らせる傾向があるのか。これ

こそが重要な問題である。著者は陰鬱さを誇張した見解を提示した。これからその誤りを明らかにするが、原理を考察する際に著者は、最も賢明で最も素晴らしい自然の備え〔provisions〕を悪徳と悲惨の直接的な手段として描き出した。彼の新しい考え方も、それ以前の体系家たちと同じ大きな誤りに陥っているように思われる。注意を単独の対象だけに向けたので、社会の偉大な機構を動かしている他の全ての原動力〔wheels〕の作用を見逃した。その発見の熱意についてはすでに述べたが、仮説を推し進めることで、この社会と政治の機構の主要な原動力〔master-spring〕としての人口原理を確立しようと著者は努力した。そして、社会の善と悪の少なくとも半分ずつを、その原理の有利な働きと不利な働きに由来するものとした。第3命題を確立することが『人口論』の主要目的であり、著者は古代から現代までの豊富な統計文書を用いてそれを例証しようとした。その命題とは、「人口のきわだって強力な力を抑えこむあらゆる妨げは、〈道徳的抑制、悪徳、悲惨〉のいずれかに分解できる」〔p.16〕。<sup>(10)</sup>

この著作にはかなり重要な一つの誤りが浸透している。それは3つの妨げの作用を区別することなく、著者が一緒に扱っていることだ。一国の人口を規制するのに、この3つは事物の本性から必然とは言えないにせよ、いずれも必然的な要因として、少なくとも今の社会の状況ではそうであると著者は見なしているようだ。摂理の支配を望ましい方向で見ようとする気がないので、〈道徳的抑制〉の作用と認めたものの10倍が〈悪徳と悲惨〉に起因するものとしている。しかし、事物が自然的状態で発展すれば、著者がこの社会における人間を歪んで見ていることが証明されるだろうし、過剰人口のために自然が備えた真の明らかな妨げが何であるかも明らかになるだろう。著書が陥っているもう一つの間違いは、悪徳と悲惨の二つの妨げが、人口の増加を抑える様態を十分に説明していないし、定義もしていないことだ。悪徳と悲惨を過剰人口の直接的な〈結果〉として論じている所もあれば、別の所では、悪徳と悲惨は、それが広まることで過剰人口の〈発生〉を抑



えこむ主要な妨げであると論じようとしている。都合よく議論を使い分けている。著作全体におよんでいて、彼の推論全体を台無しにしている主要な誤りがある。それは人口の〈原理〉と、単純に考察された人口、すなわち現実の人口もしくは所与の人口数とその増加とを、ひどく混同している点である。また両者に対する妨げを類似の原因から生じ、類似の結果をもたらすかのように、ひとまとめにして論じている点である。著者は道徳的抑制を人口〈原理〉に対する予防的妨げと名付け、悪徳と悲慘を積極的妨げと名付けている。他方で、予防だけが唯一の抑制となりうるかのように、道徳的抑制だけを原理に対する妨げとしている。悪徳と悲慘は死亡〔mortality〕の原因であるかもしれないが、特異な場合を除けば、決して人口〈原理〉に影響を与えることはない。悪徳と悲慘が単純に考察された人口にほとんど、あるいは全く影響を与えないことは、これから明らかになっていくだろう。

いかなる国でも食料の供給の大きさが必然的に住民数を制限している。だから人口の増加率は生活資料の増加率によって規制されなければならない。新興国や新しい植民地では、広大な領土が耕作のための労働者の供給を必要としているので、人口原理は制約されることなく機能するだろう。そして莫大な数の子孫を生み出す早婚が、そうした国では自然なことになるだろう。スミスが『国富論』で述べているように、アメリカ植民地では、とりわけ内陸の入植地では、小さな子どもたちからなる大家族でさえも、富の源泉と見なされている。第二の夫にとって未亡人の子供ほど魅力的な持参金はない。社会がこのような状態にあると、下層階級は結婚に強く引かれる。そして高賃金と安定した雇用が繁栄の持続を保証している。<sup>(11)</sup>しかし住民で一杯となっている社会では、あらゆる雇用が満たされており、生活資料に対する需要はその国が提供できる限界に達している。人口原理はこの明確な制限を受けている。国民の欲望は決まっているし、供給も決まっているから、人口数は必然的に決定される。しかしながら、我々が知っている国で生産の上限にまで達した国はな

い。生産を増加させる可能性、すなわち生産を遂行する能力があるならば、住民数が増加する余地がある。住民数の増加は土地の生産力のゆっくりとした上昇に合致しなければならない。人口は完全にはないが、絶対的に〔absolutely〕抑制されている。どんな社会もこの豊富さの限度へと急速に向かう傾向がある。どんな国土においても住民がひとたび充満に達してしまうと、住民数の維持もしくはわずかな増加が人口原理の作用できる範囲となる。それに加えて、充満への到達はあらゆる社会の偉大な道徳的目的でもある。充満に到達するやいなや、それを実現した人口原理は、人口の維持という重要な役割とその拡大の両方に向けられることになる。これこそが摂理の最も賢明で最も強力な命令の作用である。これこそが種の増加の定めである。この定めは、社会のどんな発展段階にも、どんな状況にも、見事に当てはまっている。この神の命令や定めの中に、悪徳や悲慘が存在する余地などないように思われる。逆に、社会の秩序、幸福、福利（well-being）が最高の知性、究極の慈愛によって準備されているのだ。先見の能力がある存在にとって、道徳的抑制は自然なそして唯一の必然的な人口の妨げである。社会の状態から分かるように、道徳的抑制は妨げが必要となるのに応じて実施されているだろう。しかし、悪徳と悲慘は人口とは少しも必然的な関係を持っていない。悪徳と悲慘はせいぜい人為的または偶発的な妨げと見なされるにすぎない。そうした場合でも実際のところ悪徳と悲慘が持つ効力はほとんどないし、あるいはごくわずかにあるにすぎない。それゆえ、起源と作用が明らかに異なる3つの原因を混同している点で、マルサスは大きな誤りに陥っている。

しかし、著者は自らの学説をさらに進めていく。道徳的抑制が人口の妨げとしては不十分であること、そしてこれまでどの国でも悪徳と悲慘が「大地が生み出す食糧の水準まで住民数を低める」主要な要因であったことを証明するのが、彼の推論の主要な目的の一つなのである。<sup>(12)</sup>「自らに与えられた栄養物を越えて増加しようとする全ての生物が持っている傾向」〔p.2〕についてマル

サスは次のように述べている。「この原理の自然的で必然的な結果は、この主題を扱ってきた著者たちがほぼ完全に見逃してきた。しかしながら、おそらくこの結果の中に、あらゆる時代の知識のある博愛家が絶えずその是正を目的としてきた、悪徳と悲慘の非常に多くの部分を、数えることが出来よう」(ch.1, p.2)。これに続くページで著者は次のように述べている。「食糧を人間の生活に必要とさせる、われわれの自然の法則によって、人口は自らを養い得る最低の養分以上に実際に増加することは決して出来ないのであるから、食物獲得の困難から生ずる人口に対する強力な妨げが不断に作用していなければならない。この困難は」と彼は続ける。「どこかに降りかからなければならない、そして必然的に人類の大部分によって、何らかの形の悲慘または悲慘の恐怖として、感じられなければならない」[p.3]。『人口論』の他の箇所でもマルサスは、「人口を何年もの間、生活資料のレベルまで抑制するのに役立ってきたある妨げについてはある著者〔ゴドウィン〕に負っている。その妨げは道徳的抑制以外の、悪徳や悲慘の枠に分類するのは適切ではない。実のところ、それが将来、普及することをどれほど望んでいようとも、過去においては取るに足らないほどの効力しか持たなかったことは疑いがない」[pp.383-384]。<sup>(13)</sup> 著者はこの妨げが「悲慘」と名づけたものを全く伴わないことを認めようとしなない。「それ以外は潔白で、きわめて自然的な性向に対する抑制であることを考慮するならば、一時的な不幸をある程度、生み出すことは許容されなければならない」[p.10]。<sup>(14)</sup> 著者が「悪徳と悲慘」を人口に対する主要で必然的な妨げであると見なしていようとは、これらのパッセージからは思いつかないかもしれない。しかし、次のパッセージならば議論の余地がないだろう。それはマルサスの仮定とその根本的な原理の傾向からゴドウィンが導き出した誤解を反駁している箇所である。マルサスは述べている。「社会の政治的な監督者は家長のような配慮で保護し、人類にとって利益と安全の2大手段である悪徳と悲慘とを気かけなければならない。そして人口の原理を適切な範囲に抑えこむた

めには、悪徳と悲慘が少なすぎることは恐ろしい害悪はない。こんなことが、私の見解からの正しい推論であるなどと彼〔ゴドウィン〕が考えているのは全く遺憾である。」[p.381] 著者は続ける。「ゴドウィンはいかなる種類の害悪がまだ残されていると想像しているのだろうか。私は途方にくれてしまう。なぜならば、これらの有益な妨げがそうした害悪を防いでいるからだ。〈悪徳と悲慘よりも強力であり包括的な状況を私は知らない。唯一の問題は、それが多いか少ないかの程度である。〉」人口原理を抑えこむ目的で、世の中にある悪徳と悲慘の適正量を維持するのに、立法者と公共の保護者の監督を必要とするというのがゴドウィンの誤った考えである。しかし、マルサスによれば、その原理自体が固有の力で、十分な量を必ず生み出すがゆえに、ゴドウィンの考えは間違っているというのである。マルサスによれば、〈害悪〉は必然的に人口原理の作用そのものの中に組み込まれており、「唯一の問題は、それが多いか少ないかの程度である。」マルサスはこれらの必然的な帰結を、種の増殖という、この根本的な自然の法則のせいにしたのである。その帰結は、人間の先見の明の浅さと人間の制度の愚かさが人類に与えた帰結と比較にならないほど、恐るべきものである。「人間の制度は人類の災厄の際立った原因であるように見えるが、自然の法則から生じる害悪の根深い所にある原因と比較すれば、それは実際にはささいな表面的なものにすぎない。」(p.367) このように大胆かつ躊躇のない表明をした後で、次のような修辭的な誇張があることでいくらか救われる。「人口の力は人間に生活資料を産出する大地の力を上回っているので、予防的妨げによって阻止されなければ、幼児死亡がなんらかの別の形で人類に降りかかってくる。人類の悪徳は活力があり、人口を減退させる有能な神の下僕であり、破壊的な軍隊に先駆するものであり、しばしば恐怖の仕事を終わらせてくれる。万一、この悪徳が力を振るわなければ、不順な天候、疫病や伝染病が恐ろしい隊列でやってきて、数千人あるいは数万人の命を奪う。もしこれでも不十分であるならば、大規模で避けがたい飢饉が

その後で蔓延する。強力な一撃で、人口は世界の食料の水準と一致させられる。」[p.350]<sup>(15)</sup>

世界の道徳的統治 (moral government) に関するマルサスの議論はここで切り上げて、〈悪徳〉と〈悲惨〉がどこまで人口と関連しているのかをまず確かめたい。<sup>(16)</sup> 次に〈道徳的抑制〉によって人口が生活必需品に合致する際の影響の程度を調べよう。新興国と植民地の歴史から、圧政と抑圧によって過酷に押さえ込まれなければ、急増する幾何級数の割合で人口が増加することは普遍的に知られている。そのうえ、最初の入植者の道徳的、政治的性格を調べるならば、きわめて有徳であったり、きわめて賢明であったりするということはないだろう。一般に、略奪、残虐、残忍さが彼らの行動や振る舞いを特徴付けてきた。富への欲求と征服の願望が彼らを律する原理であった。とりわけ現代においては、彼らが入り込んだ場所はどこでも、いたるところ破壊され廃墟となった。インドへの冒険、アメリカと西インド諸島の発見によって、様々な恐るべき状況が生まれ、極悪な犯罪が行われた。偽りと不正義こそが、自ら植民地に入植することを買ってでた人たちの際立った性格となった。彼らの増殖は世界を驚かせた。彼らが植民を進めるにつれて、植民地はより正常化し、有徳な場所になったのは事実であるが、その原因は普遍的な雇用と労働と技能に対する需要にある。それらが悪習と不品行を身につける機会を減らしたからである。しかし、最初の入植者については一般に次のことが言えるだろう。大抵の場合、彼らは自らが捨て去ったコミュニティにとって厄介者で、絶望的な冒険に駆り立てられたということ。そして、彼らは統治したりあるいは統治に従ったりすることがもっともありそうもない人々であること。そのうえ、古い国では、道徳的にも政治的にも不利であると見なされそうな状況のもとで働いているので、この目で見なければ信じられないほどの比率で必ず増殖してきたということ。このように言ってよいだろう。戦争と気候の障害が悲惨の一つであるとするならば、悪徳と悲惨があるにもかかわらず、人口が最も活力溢れて増加することをこの事実は示している。

人で一杯まで満たされ、通常の統治が行われている国家では、悪徳と悲惨は新しい植民地に蔓延していたのとは全く違う種類のものとなる。そうした国では〔人口の〕増加は必然的にきわめてゆっくりとしたものになるから、マルサスの仮説に従えば、悪徳と悲惨の蓄積は予測できないほど大きくなっているにちがいない。途方もなく、当てにならない予測を必要とする主題ではよくあるように、一般的な議論に固執すると混乱を招くだけである。より具体的に考えるためには、特定の国を取り上げるのが得策であろう。他のどの国よりも我々がよく知っている国だから、イングランドを考察の対象にするのが都合がよい。この国も一定の領土の上に多くの人口を抱えている。それゆえ、人口の増加を抑制する強力な作用のよい例証となっているはずだから、マルサスの学説にとってとりわけ有利な事例である。彼自身の計算に従えば、現在の水準に人口を維持するためには、どんなに高く見積もってもこの国の繁殖力の半分も必要としない。それでは、残りの半分の人口を増やそうとする力は、一体、何によって抑制されているのだろうか？マルサスは道徳的抑制について断言している。「道徳的抑制が将来、普及することを我々がどれほど希望しようとも、それは過去において微力な力しか発揮できなかったのは疑いない」[p.384]。彼が挙げている他の2つの原因である悪徳と悲惨だけで、ほぼ〔増殖〕力を抑えこんできたのだ。これまでの議論からの直接的な帰結は次のようになる。この国の約半分の大人が悪徳と悲惨のせいで、この国の人口に貢献するという役割を奪われている。あまりにも馬鹿げているが、結婚しないもしくは子供のいないおよそ半数の人たちは、悪徳と悲惨のせいで夫や父となることができないのだ。マルサスの学説をたった一つの理解できる事例に適用して、じっくりと考えるならば、その誤りと馬鹿らしさは明白なものとなる。彼の推論は、思索の上だけだとしばしばもっともらしく見えるけれども、事実と矛盾すると退却し始める。しかし、人口を抑えこんでいる妨げについては、イングランドも他のヨーロッパの文明国と全く同じ状態にある。それゆえ、マ

ルサスの推論について今述べたことは、大陸の文明国に当てはめてもよい。しかしながら、ヨーロッパでもイングランドと同じ割合の住民が、悪徳と悲惨のせいで種を増やせないとか維持できない、と言うほど無知で無礼なものはいないはずだ。しかし、何らかの他の原因によって、ヨーロッパの人口が現在の範囲内に抑えこまれているというのもまた事実である。それゆえ、先ほどの原理によって人口が妨げられているところにまで抑えこめるほど、悪徳と悲惨は十分な規模になっていないし、支配的な妨げにはなりえないというのが正しい。悪徳と悲惨は、いろいろな病気を含むならば、人類にとって残念ながら実際に多くの死亡の原因となっている。しかし、この国およびあらゆる文明国の今の社会状況には、いろいろな悪徳と悲惨が広まっているにせよ、その10倍もの悪徳と悲惨に打ち勝つほど人口増加の勢いがある、と私は躊躇なく言いたい。

マルサスが強調した乱交という悪徳は、社会の利害と福利にとってほとんど害となっていないに違いない。<sup>(17)</sup> 乱交は有徳な婚姻関係を形成しようとする意欲を多くの男性から奪ってしまい、多くの女性が母親になることを妨げている。しかし、わずかな例外を除けば、その悪徳がどこかの国の人口に大きな影響を与えているというのは疑わしい。ここで言う人口が意味しているのは、所与の状態での生活資料の需要または供給に適合する人数の維持と増加である。覚えておく必要があるのは、新しい植民地のような特別に有利な環境を例外とすれば、どの社会もそうなのだが、それが置かれている環境の中で、定員一杯まで満たされた時には増殖力の一部しか発現しないということであり、また人口の源泉が四分の一ほど妨げられたとしても、その不足分は容易に残りの源泉によって埋め合わされるということである。国家が休眠状態にある機能によって弱体化するのは、特定の諸個人が結婚しないからではない。他の人達が結婚する機会はある。だから均衡は十分維持される。自然の法則によって、大半の人間は婚姻関係の形成を強制される。現在、地球が人間で膨れ上がっていないのは、さらに強力な反作用となる別

の法則があるからにはかならない。そのうえ、住民が定員一杯になってしまった領土では、生活資料を供給する能力のゆっくりとした増大に人口増加率が制限されるので、全員が家族を持つことはできない。この悪徳に耽ることで、人口という共通のストックを増やすことができなかった個人は、別の境遇に置かれても結婚できなかったかもしれない。事物の秩序は、原因としてではなく、結果として、結婚できないという、この悪徳を生み出したのである。その悪徳の作用によって妨げられてきた結婚がかなり多かった、というのは疑わしい。一般的に論じるならば、こうした理由による一国の国民のマナー全体の墮落が人口増加の著しい障害になると言えたとしても、歴史は正反對の証拠となる。革命以後のフランスの人口ほど適切な事例はありえない。フランスの統計を主題とする章で、マルサスは革命によって250万人が犠牲になったと推計している。しかも、その当時よりもフランスの人口は減るどころか増加したと彼は考えている。私もそうした増加は大いにありそうだと考えているが、もしそうだとすると、洗練された国家でしか存在しないような不品行なマナーの体系を導入したにもかかわらず、人口増加が起きていたことになる。古い統治の時期でも私生児の割合はとても高く、年間の全出生数の47分の1であった。それが今では11分の1である。人口増加の障害となる、他のあらゆる悪徳もおそらくかなりの程度は行われているだろう。そのうえ、あらゆる予防的な原因の絡み合いに打ち勝って、しかも外国にいる軍人や国内の市民が経験した損失や荒廃のもとでも、フランスの人口は増加した。

乱交と同様に過度の飲酒という悪徳もコミュニティの道徳と幸福に深刻な影響を間違いなくもたらしてきた。飲酒によって実務家や労働者の日常業務の規則正しく適切な遂行が妨げられている。とりわけ下層の既婚男性にとって、この悪徳はもっとも有害な結果を彼自身だけでなく、配偶者や家族にも与えてきた。それは子供の養育に、衣食や教育の提供に悪影響を与える。要するに、貧困、病氣、死亡を引き起こす原因である。しかし、



一国の人口は道徳や幸福とは全く別の問題である。我々が今、論じているのは人口である。飲酒という悪徳は乱交ほど大きな打撃を人口に与えない。飲酒が必ずしも個人の生殖機能をだめにするとは言えない。飲酒のせいで慎慮が働かなくなったり、浪費家のように洞察力を失ったりする傾向によって、飲酒がない場合と比べて結婚が増えるか否かは議論の余地がある。もし増えたとすれば、飲酒に耽っている親たちのせいで生じている欠乏や育児放棄を生き延びる子供は、主にそうした要因で亡くなってしまふ子供よりも間違いなくはるかに多いだろう。このことはマルサスとは対立する主張を打ち立てることになるだろう。マルサスはこの悪徳を人口の妨げと位置づけていたが、実際には大都市に住んでいる困窮極まる貧民や失業者を絶えず生み出す源泉なのである。<sup>(18)</sup> 彼らは、より有徳な人たちを維持するかもしれない生活資料を消費してしまうだけでなく、こそ泥や窃盗、殺人などの社会の疫病となる。私はこのとおりだと考えたいが、これが根拠のない見解だと認めたでしょう。そして飲酒という悪徳は多くの出生を妨げ、飲酒に耽っている人たちの早死を引き起こすでしょう。さらに、今述べてきた悪徳によって出生の予防〔preventions〕と死亡が引き起こされ、また長くおぞましいカタログに姿を表すその他の悪徳の影響も加わるとしよう。イングランドや他のヨーロッパの国が、これまでこれらの原因によって人口が足りないと不満を述べてきたことがあるだろうか。仮に何らかの超自然的な力によって突然、肥沃度が2倍になったとしよう。その時、これらの悪徳の広まりが生み出す人口増加に抵抗する力が50倍もあるにもかかわらず、人口も肥沃度と同じぐらい突然に比例的な増加を経験するだろうか。実際にこうしたことが起きるとは考えにくい。なぜならば、全般的に豊かになると〔a general plenty〕これらの悪徳による死亡も減少するからだ。しかし、悪徳を実行しているためにその国の人口を増やせない人たちだけが豊かになったとしよう。この時、増加の速さが押さえ込まれることはほとんどないだろう。

実のところ、マルサスはこの仮説の根本的な部

分を扱う際に誤りを犯している。すなわち、人口の原理、単純に考察される人口、死亡〔mortality〕を混同している。そして、これらの言葉を都合がよいように、曖昧かつごちゃ混ぜで用いている。

人口の原理は単に、人間に備わっている種を産み出す多産な力を意味しているに過ぎない。その力は、経験によって確かめられているように、好ましい状況では25年で人口数を倍にできる力である。

人口という言葉は単に所与の人口数の存在または増加を意味しているだけである。それゆえ、人口はその社会の状況が許容できる数よりも多いことも少ないこともあるし、あるいはちょうど一致することもある。

死亡〔mortality〕は、継続して起きる〔successive〕個人の死を指すだけだから、定義する必要はない。

悪徳と悲慘の効果によって人口の原理が、今もそして将来も大いにその力を弱めているというのは、古物愛好家や生理学者にとってきわめて興味深い研究対象であろう。彼らの研究結果は幸福や人類の増加に影響を与えないから、その研究は最も無思慮で最も空想的な人間に委ねてもよいだろう。実務的な思想家や政治家にとって関心があるのは、地球の離れた場所に最近入植したわずかな人たちが、急速にそして原理を打ち立てられるほど広い範囲にわたって増加したかどうかである。どの国家にとっても、社会のどんな目的にとっても、〈原理〔本質〕〉は多産的である。政府や国民のマナーがきわめて特異な場合を除けば（この考察の最初に注意したように）、状況が有利であるか不利であるか、すなわち生活必需品が豊富か欠乏しているかが原理に影響を与える唯一の原因であるように思われる。しかし、自然界における変則事例を注意深く扱わなければならないのと同様に、この例外はごく少数であるから、一般的な規則を無効にできない。ローマでは、公共の売春宿を抑制したり推奨したりすることで、あるいは女性の地位や状態を悪化させることで、もっと後の時代になると、不自然で忌まわしい放蕩なあらゆる習俗をいたるところに導入することで、人口の

根源を確実に断ち切った。ローマ同様にギリシャの大半に存在した奴隷制度は、増加原理の自然的な作用を間違いなく阻害した。近代における奴隷制度も間接的、時には直接的に同じ効果を持っている。しかし、奴隷制度は増加原理に対する実際の妨げの一つではあるけれども、原理が完全に作用する余地がある場所では、実際の妨げにはなっていないだろう。だから、これらの原因によって人口が減少したと嘆いた地域は存在しなかったに違いない。よく知られているように、ローマは驚くべき範囲でこれらの障害があったにもかかわらず、人口を何倍にも増加させてきた。

(粗野な言い回しが許されるならば)ローマは自らの重みで沈んでしまったと言えよう。ロシアは、現在の農業の改善に関する状況に照らしてみると、奴隷制度によって自然な人口増加が妨げられてきた。しかし、同時に、現在も将来も、人々が必要としている以上の生活必需品を持て余しているなどという不満が生まれる理由はない。ロシアもそれ以外の国も人口は不足になるよりもはるかに過剰になりやすい。しかるべき規模に人口を抑制するためには、奴隷制度という原因から原理が受けた人口減少とは比べものにならないほど強力な効果を持つ妨げが必要である。<sup>(19)</sup>

乱交という悪徳は、法律によって助長されなければ、人口への有効な圧力になった試しはない。乱交が公には認められていない国でも、その国の人口を維持するのに必要でない増殖力のほんの一部分に影響を与えるだけである。飲酒やそれ以外の放蕩も、同一の状況のもとでは、実際に人口の自然的増加の障害にはなり得ない。『人口論』の後半の章には次のような(おそらく擁護できない)一節がある。それは明らかに私が主張しようとしているのと同じ学説である。「いかなる原因も、肉体的であれ道徳的であれ過度にそして異常に作用しない限りは、それが生活資料の生産と分配に影響を与えない限り、人口に顕著な影響を及ぼすことはない」[p.178]と著者は述べている。私はこの意見に完全に同意する。しかし、私がこれまで反駁を試みてきた、〈悪徳〉と〈悲慘〉が人口に対する偉大な妨げであるという学説とは完全

に矛盾するように思われると言わなければならない。というのは、著者はこれら〔悪徳と悲慘〕が生産手段の生産と分配に実質的に影響を与えると考えていないからだ。悪い統治や拙劣な制度もある程度影響をあたえるかもしれない。この点についてもっと詳しく考察してみよう。生産手段の生産は労働に依存する。どの国でも労働者は需要に応じて準備されることになるから、長い期間にわたって人口のうち労働者の部分が不足するということはめったに起きない。生活資料の分配は人的制度によってある程度、影響を受けるにすぎない。技能における改善、科学の進展、人間と財産の保護、人々の道徳の維持は、人口を増加させる唯一の真の根本的な手段である。どの領土においても、それらが人口増加のための生活物資〔provision〕を増加させる。これは人間社会の自明で、合理的で、単純な捉え方である。

しかし、私は「悲慘」の考察を完全に無視したわけではない。マルサスによれば、それが人口の主要な妨げの一つである。本書の冒頭で引用した一節をもう一度あげておく。「食糧を人間の生活に必要とさせる、われわれの自然の法則によって、人口は自らを養い得る最低の養分以上に実際に増加することは決して出来ないのであるから、食物獲得の困難から生ずる人口に対する強力な妨げが不断に作用していなければならない。この困難は」と彼は続ける。「どこかに降りかからなければならない、そして必然的に人類の大部分によって、何らかの形の〈悲慘または悲慘の恐怖〉として、感じられなければならない」[p.3]。悲慘の恐怖は道徳的抑制の別の表現であるから、適切な場所で改めて考察することにしよう。「自らを養い得る最低の養分」で生存しているような人たちは、地球上では最も粗野か野蛮な住民ぐらいだろうし、文明国では少数のものがたまにいるぐらいだろう。そうした状態にあるものとして、ニュー・ホランドのフェゴ諸島の住民とアメリカ・インディアンの一部について、マルサスが著作の中で語っているのは、間違いなく正しい。労働も技能も先見も、こうした非人間的な種族の個人に備わっているようには思われない。彼らの増

加は何らかの妨げによって制限されなければならない。貧困と飢饉だけがそうした制限をもたらさう要因である。全員の生活資料が最低限または最低限ぎりぎりまで引き下げられているので、新しい成員が社会に現れるとそれに対応する古い成員が姿を消さなければならない。人口原理はどんな社会でも適切な限界を超え出ようとしているから、不利な地域の成員は貧困と飢饉により毎年、成人に達する前に死ななければならない。このような場合には、悲惨は疑いもなく人口の偉大な妨げである。しかし、人類がこの恐るべき野蛮な状態から抜け出るのに比例して、それに付随する先見、技能、労働が直ちにこの「恐るべき余剰人員の是正」を作用しないようにする。道徳的抑制が支配的になるまでには時間がかかる。野蛮な種族の支配的な階層の中では、性的情念の弱さ、女性の悪化した状態、婚姻のいい加減さ [laxity of alliances]、児童の放置や遺棄が、通常のそして最も強力な制限となる。しかし文明が進歩するにつれて、道徳的抑制がより一般的でより有効になる。そうになると、絶対的な欠乏で亡くなるものはほとんどいなくなる。そうした人たちは新しく日々生まれてくる人たちの数と比例しなくなる。悲惨はなお個人の死亡の一つの原因ではあるにせよ、人口に対する真の妨げではなくなっている。

マルサスの根本学説、すなわち〈悪徳〉と〈悲惨〉を人口に対する主要でほぼ唯一の妨げとする学説の論駁を行ってきた。私はそれが成功したと信じている。残されているのは、第三の妨げである〈道徳的抑制〉の作用の考察だけである。道徳的抑制を人口原理と関連付けるとき、マルサスは正しく道徳的抑制を予防的妨げと呼んだ。その目的は生活資料の増加と人類の増加を一致させるところにある。しかしながら、マルサスはどんな社会の発展段階でも道徳的抑制の作用が大きくなることを認めようとはしなかった。

「道徳的抑制が将来、普及することを我々がどれほど希望しようとも、それは過去において微力な力しか発揮できなかったのは疑いない」[p.384]とマルサスは言う。歴史や観察、推論から私は正反対の結論を下す。私がこれまで確立させようと

してきた真理、すなわち悪徳と悲惨は偉大でもなければ一般的で〈もない〉という真理から、唯一残った道徳的抑制はとてつもなく強力でも一般的に作用するということを直接かつ正しく導出することができる。人類の最も低い段階であれば、この妨げは効果がないほど弱々しく機能していたにすぎなかったし、余剰人員を主に是正していたのが貧困と飢饉であったことを認めよう。しかし、人々が文明化されると、他の人々の行為を予見することがいつものこととなる。現在の目的はもっぱら、将来の考慮と将来の備えになる。婚姻関係を形成し、生活の糧と保護を親に頼るしかない子供を生むときに、こうした予見が最も必要となる。文明化された生活を送る最上層の間では、間違いなく道徳的抑制があまりにも影響力を発揮しすぎていると私は考えている。洗練された社会のきわめて多くの人々の場合には、習慣からおおよそ後天的な嗜好から、安楽な生活にとって絶対に必要な最初の欲望の対象と非常に高級な奢侈品とが混ざり合っている。奢侈品と生活必需品とをどのように区分しようとも、区分の仕方とこの混ざり合いとは矛盾しない。自分たちの生活を維持でき、また自分たちの子供が自分たちと同じかより高いランクの生活と消費のスタイルになる見込みができるまで、上層の男女は結婚できる状態になったとは思えない。単なる生活を送ることも、あるいは安楽な生活を送ることでさえも、彼ら自身と家族にとっては見下すべき見通しである。それは結婚の誘因には全くならず、独身のままでいる方に満足を見出すことになる。広範な階層が人為的な習慣や考え方を持つことで、予防的妨げの作用は強力に助長される。怠惰や放縦、贅沢を好むことで、社会の増殖力のかなりの部分が停止し、失われる。洗練された生活を送るあらゆる上層階級の中で、道徳的抑制の影響は著しく過大になっている。最下層から上昇してきたばかりの多くの階層がある。例えば、家事手伝い、店員、徒弟、あらゆる種類の上層の召使である。彼らの間でも、道徳的抑制の影響が広まっている。こうした者たちの大部分が主人によって養われている。それゆえ、結婚生活を楽しむための蓄えを持たな

い。あるいは結婚しがたい状態で雇われている。なぜならば、もし結婚してしまうと、安楽で贅沢な暮らしぶりを犠牲にして、その代わりにより多くの労働と相対的に貧しい食事に甘んじることになるからだ。彼らの給料〔stipend〕は、赤貧よりはましだが、一人暮らしを維持するのにちょうど足りるだけであるから、結婚すると生活できなくなると予測してしまうことになる。大学のフェローやわずかな報酬〔emolument〕を得ている専門職業人、そして文人的教養〔literary education〕を唯一の収入源としている全ての人が、人生の最初のうち、あるいはしばしば長い期間を独身で過ごさざるをえない。このように道徳的抑制は社会の増殖力を妨げる重要な要因である。これらは絶えず道徳的抑制を機能させる原因であり、常に存在していて乗り越えがたい結婚の障害である。これらの普遍的でほとんど必然的な抑制の他に、気まぐれや独身好み、結婚も不可能ではない数千人の人間を結婚生活から遠ざける一連の原因がこれに加わる。最下層から上昇してきたあらゆる階層の間で、道徳的抑制は力強く機能している。私の考えでは、道徳的抑制の力が強すぎる。不自然な欲望や人為的な対象が抑制の釣り合いにおいて優勢になりすぎていて、社会のバランスが大いに乱れている。しかし、この考えが正しいことと、それがどの程度当てはまるかを確かめるのは難しい仕事であろう。この害悪を矯正する試みは、全く希望のない仕事であろう。

《注》

- (1) P.James, *Population Malthus: His Life and Times*, 1979, Routledge, p.111.
- (2) この指摘は『人口論』第2版での道徳的抑制導入の契機とされることが多い。しかし、『人口論』初版でも理性による情念の制御を語っており、道徳的抑制の萌芽的認識は存在する。
- (3) 『自然神学』を読んだマルサスは、ペイリーを転向させたと確信した。ただし、ペイリーは人口過剰を遠い将来と見ており、マルサス説を全面的に受容したわけではない。この点はゴドウィンにも共通する。
- (4) D.Winch, Robert Malthus: Christian Moral Scientist,

Arch-Domoralizer or Implicit Secular Utilitarian?, *Utilitas*, 5-2, 1993, p.246.

- (5) C. Sugiyama and A. Pyle 編集の *Malthus and the population controversy 1803-1830* シリーズ (Routledge/ Thoemmes Press, 1994) に収録されている。
- (6) 南亮三郎『人口理論と人口問題』千倉書房, 1935年。
- (7) 中西泰之『人口学と経済学』日本経済評論社, 1997年, 第1章。
- (8) 訳出にあたっては、Mr. などの敬称は省略し、イタリック表記の箇所は〈 〉で示しておいた。〔 〕内および注は全て訳者による追記である。『人口論』第2版の引用箇所については、可能な限り〔 〕内に該当ページを補っていた。
- (9) 「3 命題」の最初の2 命題である。第2 命題中の「の作用 (operation of)」は原文にはない。第3 命題は次パラグラフの末尾で引用されている。
- (10) 第3 命題の一部が省略されている。
- (11) 該当箇所はグラスゴー版スミス著作集『国富論』第1 巻, 88 ページ。
- (12) 第3 命題をベースにしていると思われるが、引用箇所と完全に一致する表現はない。
- (13) 原典では「著者」ではなくゴドウィンと記載されている。
- (14) この箇所は第3 版で若干語句が変更された。この引用中の道徳的抑制に伴う「一時的な不幸」の中身を、マルサスは明示しているわけではないが、一定期間、結婚できず子供を持たないことを意味していると見て間違いはない。匿名氏が引用したように、マルサスは妨げを「道徳的抑制, 悪徳, 悲惨」に分解した。注意する必要があるのは「悲惨 (misery)」の用法である。この分解にあるように、主に疫病などの積極的妨げに限定して用いている場合が多いが、不幸とほぼ同じ意味で用いている場合もある。後者の用法では、道徳的抑制も悲惨の一部となってしまう。匿名氏が批判しているように、マルサスの用語法は適切なものとは言えない。
- (15) この引用を含むパラグラフは第4 版で削除された。
- (16) 道徳的統治は政治的統治の対概念である。神にデザインされた世界が、神の道徳的支配下にあるとする見解に由来する。
- (17) 匿名氏が指摘しているように、マルサスは乱交 (promiscuous intercourse) を予防的妨げの主なものと考えていた。マルサスの時代には不妊のイメージと結び付けられていた乱交は、19 世紀になると妊娠のイメージと結びつくようになる。
- (18) 『人口論』では飲酒と勤勉との関係については言及



があるが、匿名氏が指摘しているような、人口の妨げと飲酒との直接的な関係はほとんど言及がないと思われる。なお、ハズリット、ジャロルドなどマルサス批判家たちは飲酒を取り上げている。

(19) 『人口論』では主にローマにおける人口の妨げ（第

1 篇第 14 章）で奴隷制度が論じられている。そこでの議論は、奴隷制度が人口の妨げの決定的な要因とはなりえないという限りで、匿名氏とほぼ同じである。